外耳道・鼻内異物の統計的観察

湯田 厚司・前田 太郎

川口 信也・篠木 淳

Foreign Bodies in the Ear and Nose ; A Statistical Review

Atsushi Yuta, Taro Maeda,
Shinya Kawaguchi and Jun Shinogi
(Maeda ENT Hospital)

Foreign bodies in the ear and nose are commonly found by otorhinolaryngologists. A statistical review was made of 99 patients with foreign bodies in the ear and 73 patients with foreign bodies in the nose, treated at the Maeda ENT Hospital between June 1, 1988 and May 31, 1991.

1. The patients with foreign bodies in the ear showed a wide age range, but most of those with foreign bodies in the nose were children.

2. Foreign bodies in the ear were seen more often in summer because of insects, but foreign bodies in the nose showed no seasonal differences.

3. The most frequent foreign bodies in the ear were insects (37.4%), followed by toy parts (26.3%) and cotton (8.1%).

4. The most frequent foreign bodies in the nose were toy parts (43.8%), followed by food (23.3%) and paper (15.1%).

Key words: foreign body, ear, nose, otorhinolaryngology

はじめに

耳鼻咽喉科領域の異物症例は救急医療疾患の代表的存在であり、比較的良好に遭遇する疾患である^{1)~8)}。異物症例のなかでも、気管内異物、食道異物の統計的報告は多数なされているが⁹⁾¹⁰⁾症例数的には圧倒的に多い外耳道異物、鼻内異物の統計的報告例は散見するのみで、その症例数も少ない。これは、気管内異物、食道異物が、その摘出の煩雑性から主に大学病院を中心とした大病院に集中するのに対して、外耳道異物、鼻内異物は開業医院を含めた全耳鼻咽喉科病医

院に分散するため、全症例数が多いわりにはまとまった症例数が集まらないためと考えられる。当院では救急医療協力病院として、可能な限りの時間外救急医療をするように努めているため一次救急患者が集まり、外耳道・鼻内異物症例も多く経験している。そこで、当院における過去3年間の外耳道・鼻内異物につき統計的観察を行なったので、若干の文献的考察を加えて報告する。

対 象

1988年6月1日より1991年5月31日までの3

年間に当院を受診し、外耳道または鼻内に異物を認めた症例を対象とした。外耳道または鼻内異物を主訴として来院したが、診察時に異物を認めなかった疑い症例は今回の対象から除外した。

結 果

症例総数は、外耳道異物99例、鼻内異物73例であった。

1. 年齢と性差

外耳道異物は1歳から80歳まで全年齢層に分布していた(図1)。0歳から9歳までが35例と最も多く、10歳以上ではほぼ均等に分布していた。0歳から9歳までの内訳(図2)は3歳が最も多かったが、他はほぼ平均していた。性差は男性62例、女性37例で男性に多い傾向にあった。

鼻内異物は1歳から17歳までで、13歳と17歳の各1例を除いてはすべて8歳以下であり、2歳、3歳を中心に幼児に多かった(図3)。性差は男性42例、女性31例で、やや男性に多い傾向にあった。

2. 受診月別分類

外耳道異物は8月が22例で最も多く、1月、2月に少なかった(表1)。鼻内異物は1月、7月の順に多かったが、他は年間を通じてほぼ均等に分布していた(表1)。

3. 左右差

外耳道異物は左側49例、右側50例で左右差はなく、鼻内異物も両側が1例あったが、左側37例、右側35例と左右差はなかった。鼻内異物の両側例は、チューイングガムを両鼻内に挿入し

図1 外耳道異物患者の年齢分布

図2 外耳道異物患者の10歳未満の年齢分布

た3歳女兒の1例であった.

4. 異物の内容

1) 外耳道異物

昆虫が37例(37.4%)で最も多く, 次いで玩具類26例(26.3%), 綿花8例(8.1%), 毛髪6例

(6.1%), 食品5例(5.1%)の順であった(表2). 昆虫の37例は, 5歳と9歳の各1例を除くとすべて成人であった. また, 昆虫の症例を受診月別に分類すると7月, 8月に集中しており, 12月から2月の冬期には1例もなかった(表3).

図3 鼻内異物患者の年齢分布

表1 外耳道・鼻内異物患者の受診月別患者数

月	外耳道異物	鼻内異物
1	2例	13例
2	1	5
3	8	5
4	10	2
5	8	8
6	7	7
7	9	10
8	22	3
9	7	4
10	11	6
11	9	5
12	5	5

表2 外耳道・鼻内異物の異物内容

〈外耳道異物〉	
昆虫	37例 (37.4%)
玩具類	26 (26.3%)
綿花	8 (8.1%)
毛髪	6 (6.1%)
食品	5 (5.1%)
紙類	3 (3.0%)
砂	3 (3.0%)
耳かき	2 (2.0%)
マッチ棒	2 (2.0%)
その他	7
(発泡スチロール, 花びら, タンポン, 耳栓, イヤホン, マチ針の先, 血塊)	
〈鼻内異物〉	
玩具類	32例 (43.8%)
食品	17 (23.3%)
紙類	11 (15.1%)
セロハンテープ	4 (5.5%)
ボタン	2 (2.7%)
ビニール	2 (2.7%)
その他	5
(発泡スチロール, プラスチック, ガーゼ, キャップ, 釣り用のうき)	

玩具類26例のうちでは、ビーズ玉・鉄砲玉のような球状のものが21例を占めていた。綿花はすべて耳かきの先の綿花で、耳掃除中に耳内に残ってしまい、取れなくなったものであった。マッチ棒の2例は耳掃除の目的で使用して折れて取れなくなったもので、耳かきの2例は、1例が耳掃除中に突き刺してしまい、外耳道にささったまま来院したもので、鼓膜穿孔は認めるものの、内耳障害、耳小骨損傷は認めなかった症例であった。他の1例も耳かきの先が折れて取れなくなったものであり、耳掃除に起因する症例が合計12例あった。タンポンの1例は、他院で急性中耳炎の治療中に通院しなくなり、2カ月間放置されていた症例で、マチ針の先の1例は耳垢を主訴に来院した際に異物を認めたため問診したところ、12歳時に挿入したが8年

間放置されていた症例であった。

全症例の内容を不可抗力によるものと、不可抗力によらないものとに分類すると、不可抗力によるものは61例、不可抗力によらないものは38例であった。不可抗力によらないものの年齢層をみると、上述の20歳のマチ針の先の1例を除くと、15歳の1例が最高年齢で、他はすべて11歳以下であった。

2) 鼻内異物

玩具類が32例(43.8%)と最も多く、次いで食品17例(23.3%)、紙11例(15.1%)、セロハンテープ4例(5.5%)の順であった(表2)。玩具類32例のなかでは、パチンコ玉のような球状のものが24例を占めていた。ガーゼの1例は、他院にて鼻出血止血のために挿入されたが、その後通院せず、4日たってから鼻汁を主訴に来院した症例であった。

5. 来院時間と地域分類

外耳道・鼻内異物ともに時間外救急外来に受診する患者が多かった(表4)。地域的には松阪市および松阪市近郊が多かったが、時間外の来院者のうち半数近くが遠方よりの来院であった。

考 察

外耳道・鼻内異物の症例数は多いものの、症例が開業医院を含めた全耳鼻咽喉科病医院に分散するため、本邦でのまとまった症例の統計的報告は少ない。海外では、年間50例以上のまとまった症例の統計的報告^{11)~14)}があるが、Das¹¹⁾, Ijaluola¹³⁾の報告によると、外耳道・鼻内異物の大部分がいわゆる社会的低階級層に占めら

表3 昆虫による外耳道異物患者の
受診月別患者数

月	症例数
1	0例
2	0
3	1
4	2
5	2
6	3
7	7
8	14
9	3
10	4
11	1
12	0

表4 外耳道・鼻内異物患者の来院時間と地域分類

地域(来院までの必要時間)	外耳道異物		鼻内異物	
	時間内	時間外	時間内	時間外
松 阪 市 内	22例	25例	8例	27例
市外 (30分以内)	6	5	9	5
市外 (1時間以内)	7	18	4	13
市外 (1時間以上)	4	12	1	6
	39	60	22	51

れており、各国の生活水準の違いによる複雑さが大きく関与していると考えられ、必ずしも本邦の特徴と同じであるとは考えにくい。当院では、救急医療協力病院として、可能な限り時間外救急外来をするように努めており、時間外救急外来で外耳道・鼻内異物を診察する機会が多く、今回の症例数を得ることができた。

今回のわれわれの結果を考察すると、年齢的には外耳道異物が全年齢層に分散し、鼻内異物は8歳以下の小児に集中していた。これは、鼻内異物が幼児の好奇心やいたずらにより挿入されることが多いためと考えられる。また、外耳道異物も異物の種類により、不可抗力によるものと不可抗力によらないものに分類した場合、不可抗力によらない場合の年齢層がほとんど幼児であることから、鼻内異物の特徴と似ているものと思われ、外耳道異物が全年齢層に分布するのは昆虫などの不可抗力による異物が多いためと考えられた。

性差は外耳道・鼻内異物ともに男性に多く、昆虫による外耳道異物の性差は男性が22名、女性が15名と男性が多く、毛髪の長さの違いによるものと考えられたが、全体的な性比と比べて特徴的ではなかった。

月別には外耳道異物が夏に多かったが、昆虫の占める割合が多いためと考えられ、異物の内容の季節的特徴と考えられた。

Ijaduola ら¹³⁾の報告では外耳道異物は3名に2名の割合で右側に集中しており、右利きによるためと報告されているが、今回のわれわれの結果では外耳道・鼻内異物ともに左右差はなく、特に利き腕による影響はないものと考えられた。

異物の内容では、外耳道異物は昆虫、玩具類の順であったが、昆虫はほとんどが成人で、小児は5歳と9歳の各1例のみであり、小児の外耳道の大きさによるものと考えられた。逆に、鼻内異物や外耳道異物の玩具類は、ほとんどが幼児を中心とした小児であり、好奇心やいたずらによるためと考えられた。

これら異物に対しての除去方法については各施設で異なり、簡単に除去できないものに対しての除去方法について種々の報告^{115)~17)}がある。当院では容易に鑷子で除去できるものを除いて、外耳道異物は耳水銃により水圧で除去し、鼻内異物は先を弯曲させた綿棒で除去している。今回の対象症例のなかで除去不能のものはなく、また、除去による合併症もなかった。

来院時間と地域分類では、近郊よりの来院が多いものの、1時間以上かかる地域からの来院者も多く、これは当院が時間外救急をとっていることと、三重県南部での耳鼻咽喉科医の不足によるため当院までやむを得なく来院したケースがあるためと考えられた。これらのなかには、昆虫などの痛みを伴う外耳道異物例もあ

表 5 異物の挿入を主訴としなかった症例

	年齢	性別	異物内容	受診までの期間	主訴
〈外耳道異物〉					
	2歳	女	毛髪	3日	耳痛
	20	男	マチ針の先	8年	耳垢
	4	女	タンポン	2カ月	耳垢
〈鼻内異物〉					
	3歳	女	ティッシュペーパー	1日	鼻の悪臭
	2	男	ティッシュペーパー	3日	鼻漏
	1	女	ティッシュペーパー	3カ月	鼻の悪臭
	4	男	ガーゼ	4日	鼻漏
	3	男	おもちゃ	3日	鼻漏

り, 今後の問題点の一つと考えられた。時間外の来院者が多いのは, 当院が時間外救急外来を可能な限り受け入れるようにしているためと考えられた。当院での時間外救急外来の統計¹⁸⁾では, 外耳道異物が2.6%, 鼻内異物が1.9%を占め, 全異物でも12.0%を占めており, 一次救急でのこの疾患の重要性をうかがわせた。また, 外耳道異物で市内からの時間内来院の比率が高いが, このなかには昆虫によるものが多く, 成人が畑仕事中に昆虫が外耳道に入ったケースが目立っていた。

異物挿入を主訴としなかった症例を表5に示した。外耳道異物は3例で, 2例が幼児, 1例が成人で, 主訴は耳垢2例, 耳痛1例であった。耳痛は毛髪が鼓膜にあたるための痛みで, 耳垢の2例は, 4歳の1例が急性中耳炎の治療中のタンポンを2カ月間放置したためこれを耳垢としたもので, 他の20歳の1例は耳垢を主訴としたものの, 診察時に異物を認め, 問診で12歳時に異物を挿入したと判明したものであった。鼻内異物は5例で, すべて1歳から4歳までの幼児であった。主訴は鼻漏, 鼻の悪臭といったもので, 挿入物も軟らかいものが多かった。ガーゼの1例は, 鼻出血の止血のため他院で挿入されたガーゼがその後通院しなかったため残っていたものであった。受診までの期間は, 1例が3カ月前より鼻の悪臭がしたと母親が言っていたが, 幼児のため挿入された日の詳細は不明であり, 来院までは数日のものがほとんどであった。幼児の鼻漏, 鼻の悪臭という主訴に対しては異物の可能性も考える必要があると思われた。

ま と め

1988年6月1日より1991年5月31日までの3年間に当院を受診した外耳道異物99症例, 鼻内異物73症例につき統計的観察を行なった。

1) 外耳道異物は全年齢層に分布し, 鼻内異物は小児に集中しており, 両異物とも性差は認めなかった。

2) 月別には外耳道異物は夏季に多く, 昆虫によるためと考えられた。鼻内異物は年間を通

じて症例が分散していた。

3) 外耳道異物は, 昆虫が最も多く, 次いで玩具類, 綿花, 毛髪, 食品の順であった。

4) 鼻内異物は, 玩具類が最も多く, 次いで食品, 紙類, セロハンテープの順であった。

参考文献

- 1) 大川親雄: 耳鼻咽喉科領域の有生異物症. 耳鼻臨床 72 : 1105~1175, 1979.
- 2) 川島 理, 川島 尚: 耳鼻咽喉科開業医の時間外救急患者の統計. 耳鼻臨床 84 : 711~716, 1991.
- 3) 上杉恵介, 佐久間惇, 堤康一郎, 他: 当大学病院救急救命センターで取り扱った耳鼻咽喉科疾患の統計的観察. 耳鼻臨床 補9 : 66~74, 1987.
- 4) 安部治彦, 井上都子: 都立広尾病院・耳鼻咽喉科における救急外来の2年間の集計. 耳展 29 : 263~269, 1986.
- 5) 小関芳宏, 大内利昭, 井上良江, 他: 耳鼻咽喉科救急外来患者の検討. 耳展 補4 : 429~435, 1988.
- 6) 鈴木滋生, 岡 亮, 松永 喬, 他: 過去20年間に於ける当科時間外救急患者の動態. 耳鼻臨床 補37 : 346~350, 1990.
- 7) 松永 喬: 特科救急の基礎知識 耳鼻咽喉科. 救急医学 8 : 1775~1790, 1984.
- 8) 嵐 裕治, 堤 昌巳, 笠原行喜, 他: 当耳鼻咽喉科救急外来における診療の実際. 耳展 27 : 25~32, 1984.
- 9) 鶴田至宏, 佐野光仁, 松永 亨, 他: 当教室における異物症の変遷 —過去51年間の統計的観察—. 日耳鼻 87 : 1527~1537, 1984.
- 10) 松永 喬, 佐藤武男, 山田康之, 他: 我教室10年間の異物症統計. 日耳鼻 70 : 1373~1382, 1984.
- 11) Das SK : Aetiological evaluation of foreign bodies in the ear and nose. J Laryngol Otol 98 : 989~991, 1984.
- 12) Bhatia PL : Otolaryngological foreign bodies ; a study in Jos, Nigeria. Trop Doct 19 : 62~64, 1989.
- 13) Ijaluola GTA and Okeowo PA : Foreign body in the ear and its importance ; the Nigerian experience. J Trop Pediatr 32 : 4~7, 1986.

- 14) Baker MD : Foreign bodies of the ears and nose in childhood. *Pediat Emerg Care* **3** : 67~70, 1987.
- 15) O'Toole, Paris P, Stewart R, et al : Removing cockroaches from the auditory canal ; controlled trial. *N Engl J Med* **312** : 1197, 1985.
- 16) Stuart F, Gabor DK and Keith TS : Foreign bodies of the external auditory canal. *Emerg Med Clin North Ame* **5** : 183~192, 1987.
- 17) Thompson MP : Removing objects from the external auditory canal. *N Engl J Med* **311** : 1635, 1984.
- 18) 湯田厚司, 前田太郎, 篠木 淳, 他 : 時間外救急患者の統計的観察. 耳鼻臨床 **85** (印刷中)

(原稿受付 : 平成 3 年 8 月 1 日
原稿採択 : 平成 3 年 8 月 18 日
別刷請求先 : 湯田厚司
〒514 津市江戸橋2-174
三重大学医学部耳鼻咽喉科学教室)